

L・D・Kの空間構成と台所形式に対する利用者の意識

Consciousness of users to the space composition of L・D・K and kitchen style

阿 部 恵利子*

Eriko Abe

In this research, we investigate and analyze the user's awareness of the recent configuration of LDK space and kitchen style, clarify the needs of LDK space, and consider what a more comfortable space should be. The space composition of LDK and L+DK is a space that facilitates communication, but countermeasures such as hiding the kitchen from guests, countermeasures against the smell and sound of cooking and eating, and securing storage were proposed.

1. はじめに

1.1 研究の背景・目的

L・D・Kの空間構成は時代の変遷とともに変化している。近年はオープン化により家族空間を重視する傾向がみられ、「リビングキッチン (LDK)」や「対面式」、「アイランド式」といった台所形式が増加傾向にある。こうした変化は「生活時間の多様化による孤食」「家族の会話時間の減少」「個室化によるひきこもり」など、家庭生活に内在する課題に対応し変化しているように捉えることができる。本研究は、近年におけるL・D・Kの空間構成と利用者の意識を調査分析し、L・D・K空間に求められているニーズを明らかにすることで、より快適なL・D・K空間の在り方を考察することを目的とする。

1.2 既往研究・研究の意義

戦後の住様式に関しては、多くの論文が報告されている^{注1)}。わが国の住様式は敗戦後、著しい変化を遂げた。中でも、生活最小限住宅追求の結果誕生したダイニングキッチン (L+DK) は、戦後の住様式を代表する住まい方となった。この住様式は、狭小面積に対応するばかりでなく、男女平等や座式と椅子式の二重生活解消という目的をも果たした。その普及率が最も高い時期は、1960年代後半から1970年代とされている^{注2)}。したがって、ダイニングキッチンは高度経済成長期までにはほぼ浸透していたものと考えられ、高度経済成長期は、ダイニングキッチン成立時の目的や理想 (二重生活解消、食寝分離、女性の家事労働軽減) が「ダイニングキッチン、背面式」によってより具現化された時期であったことを、筆者らの研究で報告して

※ 人間生活学科

いる^{注3)}。また、ダイニングキッチン (L+DK) は、1970年代後半から減少し、この時期にリビングキッチン (LDK) が最も普及している。特に1990年以降は上昇の一途を辿っており、近年は圧倒的多数を占めている。1970年以降、「リビングキッチン (LDK)、対面式」が著しく増加していること、また近年の「アイランド式」の増加は、家族空間を重視する意識変化の表れであり、家族に対する意識の変化が「リビングキッチン (LDK)」や「対面式」、「アイランド式」の増加を促したものとする^{注4)}。

近年におけるL・D・Kの空間構成と利用者の意識を調査分析することは、現代のL・D・K空間に求められるニーズや課題を明らかにすることであり、同時に時代が求める設計手法の一端を推測することができるものとする。

2. 研究方法

本研究では、福島県郡山市に居住する世帯において台所使用頻度の高い利用者を対象にアンケート調査を実施した。46名中45名から回答が得られ、有効回答率は97.8%である。調査期間は2019年7月～2019年12月、調査内容は①台所形式別満足度 ②L・D・Kの空間構成と利用者の意識 ③台所空間において重視したい点、の4項目である。なお、居住形態は持ち家が84.4%、賃貸が15.6%で、調査対象者の8割が一戸建ての持ち家に居住している。

3. 台所利用者に対するアンケート調査結果

3.1 台所形式別満足度

調査対象者の台所形式は、対面式が48.9%で最も多く、次いで独立式26.7%、背面式22.2%、アイランド式2.2%であった (図3-1)。それぞれの台所形式に対する満足度は「満足・やや満足」が57.7%、「やや不満・不満」は22.2%、「どちらともいえない」が20.0%であった (図3-2)。

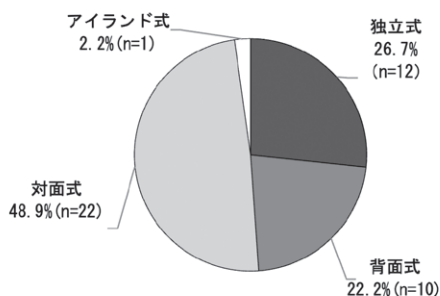


図3-1 調査対象者の台所形式 (n=45)

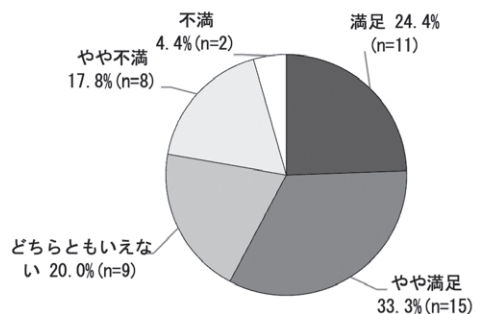


図3-2 台所形式に対する満足度 (n=45)

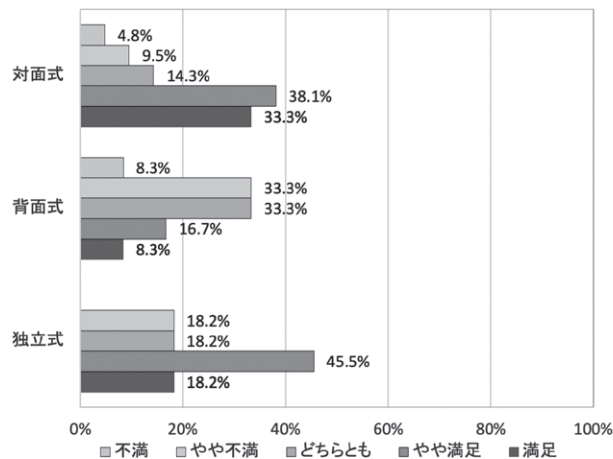


図3-3 台所形式別満足度 (n=44)

台所形式別満足度(図3-3)では、対面式71.4%の満足度が高く、独立式においても「満足・やや満足」が63.7%であることから、対面式、独立式の満足度は比較的高い傾向にあることがわかる。一方、背面式は「どちらともいえない」33.3%、「やや不満」33.3%、「不満」8.3%であり、他の台所形式よりも満足度が低い傾向がみられた。アンケート回答者の年代別にみると20代、30代、40代では対面式に対する満足度が80%以上の高い割合であるのに対し、50代、60代の割合は低い傾向にある。60代では独立式に対する満足度が50.0%であり、他の年代に比してその割合が高い傾向がうかがえた。

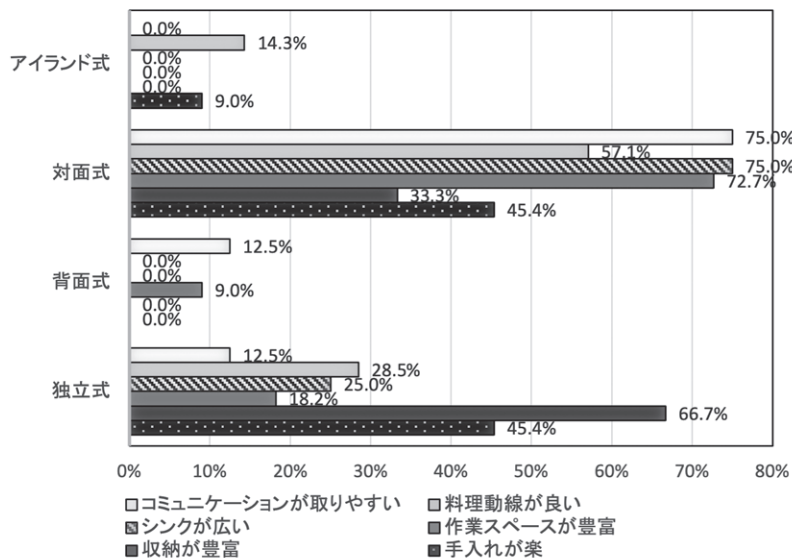


図3-4 台所形式別「満足・やや満足」の理由 (n=45)

台所形式別満足度「満足・やや満足」の理由(図3-4)は、対面式では「コミュニケーションが取りやすい」75.0%、「シンクが広い」75.0%、「作業スペースが豊富」72.7%、「料理動線が良い」57.1%であり、いずれの項目も過半を占めていることから、他の台所形式よりも満足度が高い傾向にある。また、独立式では「収納が豊富」66.7%、「手入れが楽」45.4%であり、満足度の割合が高い傾向がうかがえる。

一方、「不満・やや不満」の理由として、背面式では「シンクが狭い」、「作業スペースが狭い」、「収納が少ない」、「料理動線が悪い」、「コミュニケーションが取りにくい」などが挙げられており、満足度の高い対面式においても、「手入れがしにくい」「収納が少ない」「作業スペースが狭い」などの不満がみられた。

3.2 L・D・Kの空間構成と利用者の意識

L・D・Kの空間構成を利用者はどのように評価しているのか、図3-5に示すようにL・D・K空間の分類をLDK・L+DK・L+D+K・LD+Kの4タイプに分類し、利用者の評価を長所と短所に分けて示した(図3-6,図3-7)。なお、調査対象者が利用するL・D・Kの空間構成はLDK(51.1%)・L+DK(31.1%)・L+D+K(4.4%)・LD+K(13.3%)である。

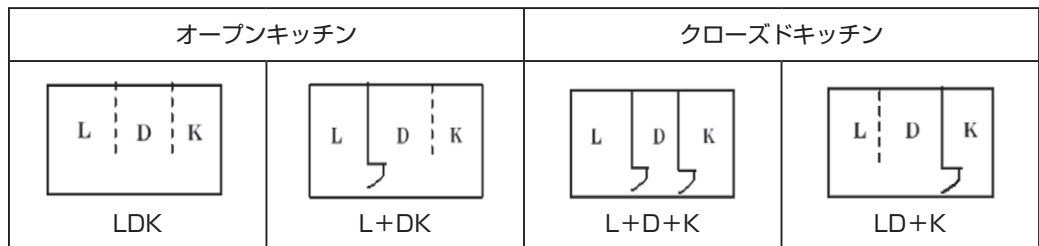


図3-5 L・D・K空間の分類

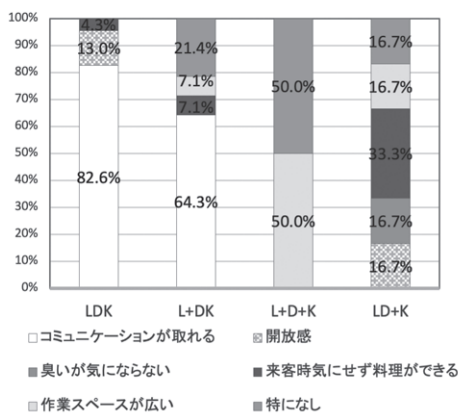


図3-6 L・D・Kの空間構成に対する利用者の意識(長所)

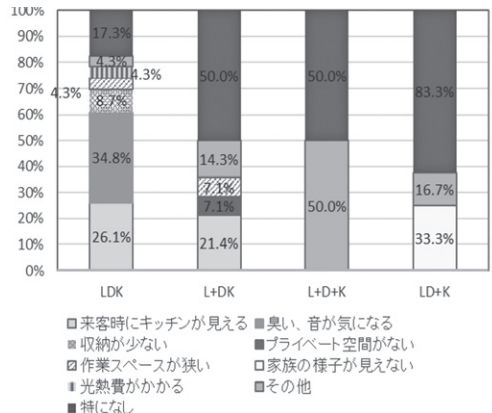


図3-7 L・D・Kの空間構成に対する利用者の意識(短所)

LDKやL+DKの評価は、その長所として「コミュニケーションが取れる」がLDK (82.6%)、L+DK (64.3%) であり、過半を占めている。L+D+Kは「作業スペースが広い」(50.0%)、LD+Kは「来客時にせず料理ができる」(33.3%) などの回答が得られた。一方、短所として、LDKは「臭い・音が気になる」(34.8%)、L+DKは「来客時にキッチンが見える」(21.4%)、LD+Kは「家族の様子が見えない」(33.3%) などの回答が得られた。L+D+Kの「その他」(50.0%) では、「風通しが悪い」「天井が低い」などの環境や構造を短所とする回答もみられた。

オープンキッチンであるLDKやL+DKは、コミュニケーションの取りやすい空間であるが、来客時に台所が見えること、調理や食事の際の臭いや音の反響を避けられない問題として捉えている傾向がうかがえた。LDKでは、収納の少なさを指摘する回答もみられた。

クローズドキッチンであるLD+KやL+D+Kは、コミュニケーションが図り難いものの、独立した一つの空間として他者の存在や音を気にせずに利用できること、作業スペースを確保しやすく効率的な機能を有していることから、利用しやすいと評価している。

台所空間で重視したい点は、図3-8に示すように「機能性」77.8%、次いで「作業動線」75.5%、「収納」60.0%の割合が高い。「作業台の高さ・広さ・奥行」35.6%、「手入れのしやすさ」26.7%、「作業スペース」24.4%であり、デザイン性や耐久性よりも調理の際の作業効率に関わる項目が重視されている。

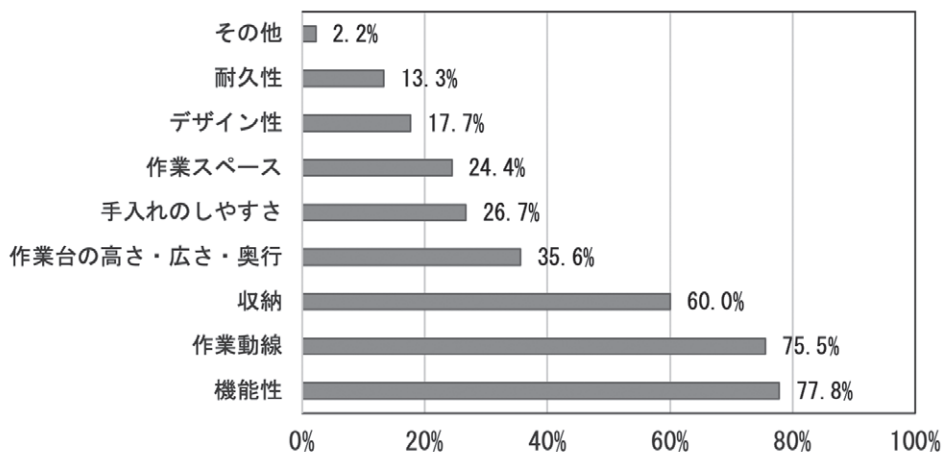


図3-8 台所空間で重視したい点 (n=45)

4. まとめ

本研究は、近年におけるL・D・Kの空間構成と利用者の意識を調査分析することで、L・D・K空間に求められているニーズを明らかにし、より快適なL・D・K空間の在り方について考察することを目的としている。調査対象者のL・D・Kの空間構成はLDK (51.1%)、L+DK (31.1%) が8割を占めており、台所形式は、対面式 (48.9%)、独立式 (26.7%) が7割を占め

ている。対面式は、20代から40代の満足度は高いものの、50代・60代では、「収納が少ない」、「手入れがしにくい」などの理由から満足度がやや低い傾向がみられた。一方、独立式では「収納の豊富さ」や「手入れのしやすさ」を理由に、50代・60代で満足度が高い傾向がうかがえた。

LDKやL+DKの空間構成はコミュニケーションの取りやすい空間であるが、来客時に台所が見えること、調理や食事の臭い、音の反響に対する改善策、収納の確保などが求められていることが示唆された。

最後に、本研究の調査結果は年齢や台所形式に偏りがみられたことから、今後は調査対象者を拡大し、居住年数や築年数をふまえた詳細な分析による、L・D・K空間に対するニーズや課題を把握し、時代が求める設計手法の一端を模索したいと考える。

注

注1)「住様式」に関しては、西山卯三、吉武泰水、鈴木成文、扇田信也、青木正夫、住田昌二、平井聖、今井範子、沢田知子他、の研究がある。

注2)西山卯三：住まいの考今学,彰国社,1989

今井範子：住様式からみた住宅平面に関する研究：博士論文,1986他による。

注3)北川圭子・阿部恵利子：戦後の住様式の変遷に関する研究—L・D・K空間のプラン分析—,日本建築学会計画系論文集 73巻 第624号,257-261,2008年2月

注4)北川圭子・阿部恵利子：戦後の住様式の変遷に関する研究Ⅰ—台所空間のプラン分析—,日本建築学会大会学術講演梗概集,2007,8月

参考文献

今井範子：博士論文,住様式からみた住宅平面に関する研究,1986年

北川圭子：ダイニングキッチンはどうして誕生した,技報堂出版,2002年1月

内田青蔵：台所の100年,ドメス出版,1999